

今まで、「発達」をキーワードに他の先生の方々が本コーナーでエッセイを書かれていました。私は、「発達格差」を題材に書いてみたいと思います。

当たり前のことですが、子どもたちにはそれぞれ能力や成長に違いがあります。知的な能力、身体的な発達、情緒的な安定などさまざまな点においてです。この違いは、もちろん生まれつきの部分もありますが、生まれた後の環境によってもかなりの程度、影響を受けることが分かっています。その代表格は、家庭環境で、特にここ数年社会的に注目されるようになってきた子どもの貧困や虐待問題などでしょう。

貧困や虐待など子ども自身には責任のないことで、成長発達に格差が出てしまうのはなんだかやるせない気がします。だから、貧困や虐待はできるだけなくした

方がよいという主張はむしろん大事です。一方で、貧困や虐待などで子どもとの間に発達格差が広がりますと社会全体にとってお得ではない、どころではなくひどい損失を生み出しているのではないかと経済学的な根拠を示して主張する研究が日本でも発表され始めました。

有名なのは、日本財団と三菱UFJリサーチ&コンサルティングが平成27年に発表した「子どもの貧困の社会的損失推計レポート」です。このレポートでは、家庭の経済状況によって子どもたちがどこまで進学するかなど学歴の違いが見られることに注目しています。子どもの発達格差のひとつの表れである学歴が異なれば、その子が大人になって一生の間に得られる収入の合計にも差が出ますが、社会全体の経済規模にも影響が出てしまいます。さらには、そ

れに合わせて税収や健康保険などの社会保障予算にも差が出るはずですが。

結論を簡単に言えば、現在15歳の子どものみを対象に、経済的に困難な世帯の子どもがそうでない世帯とほぼ同じ学歴まで達することになったら、社会全体の収入は2兆9000億円増え、税収入の面も1兆1000億円の差額が生まれ社会全体の増収になると推計しています。これは15歳のみを対象にしているの、合計4兆円が毎年社会全体としてお得になるし、現状ではその分を無駄にしているのではないかと結論づけています。

実は、海外ではこうした試算は20年以上前から行われ、多くの研究で子どもの発達格差を少なくするとおおむね社会的には高い利益がもたらされるとされているのですが、一方でその前提である発達格差をなく

すにはどうしたらいいかというところにも一定の結論が導き出されています。もちろん、ひとつには大学などの学費の高さをなんとかしなければなりません。特に日本は世界的に見て異常に高額です。

でも、それだけではだめで、実は保育や幼児教育をより手厚く質の良いものにするのが重要だといえます。これは一般に言われる早期教育の大切さを言っているのではありません。これまでの日本の保育所などで大切にしてきた、友だちや保育士といっぱい遊び、好奇心を発散できる環境の中で子どもがのびのび過ごすことが、その後の学力などの基礎を作る上でより効果的だということです。

こうした保育の良さをより充実させる施策が社会的にもお得なのではないでしょうか。



看護セミナーを開催します

市立大学看護学科では、市立大学コミュニティケア教育研究センター、北海道看護協会上川北支部三職能委員会と共催し、「看護セミナー」を開催します。

今回のテーマは、「がんを体験した医師からのメッセージ～病気をもちながらどう生きるか～」です。講師の坂下千瑞子先生（東京医科歯科大学医学部付属病院血液内科医師）は、がんを経験した医師として、また、自ら療養しながら患者支援活動や「笑い療法士」として、医師と患者の両方の立場でご活躍されています。先生の経験や考えを通して、がん患者の置かれている現状や

想い、病気があっても自分らしく生きることについて考えてみませんか。

どなたでも参加できます。参加費は無料で事前申し込みは不要です。皆さまの参加をお待ちしています。

◆とき 11月12日(土) 13:30~15:30
※12:30から受付開始

◆ところ 市立大学本館2階 321教室

◆問い合わせ 市立大学看護学科 看護セミナー係

☎ 01654②4194

FAX 01654③3354